

「主体」構築の場としての地域研究

—— 多の多義性とマレーシア ——

井 口 由 布

Area Studies as the Place of “Subjectification”

—— The Plural Meanings of Plurality in Malaysia ——

IGUCHI Yufu

はじめに

本論文の目的は、アメリカ合衆国を中心にして第二次世界大戦後に成立した地域研究という学問分野が、その研究の対象地域である植民地支配から独立した新しい国民国家における「主体」の構築に、どのようなかわりをもっているのかを明らかにすることである。地域研究は、それ以前の植民政策学から植民地主義的な枠組みを継承しつつ、地域ブロックのなかの一関数として一国研究をおこなうという新しい方法を確立し、他方、新しい国民国家における自国研究は、植民政策学の知と地域研究的な知の枠組みをみずからのものにする自己領有の過程によって形成されたといえるのではないか。

本論文で着目するのは、「^{プルーラリティ}多」という概念によって特徴づけられるマレーシアにかんする社会科学的な知の形成である。「多」という概念は、統一的な思考と方法的ナショナリズムによって特徴づけられる社会科学の外部に位置づけられたものを、科学的な管理支配の対象としてとらえようとするための、矛盾をはらんだ方途として提出されるとみることができよう。そこで、ここではマレーシアにかんする分析枠組みとしてしばしば言及される「^{プルーラル}プルーラル・ソサエティ」論に焦点をあて、「^{プルーラル}多であること」が「主体」形成にかんしていかなる問題をもたらししているかを検討する。

1 統一的な思考と「主体」形成

この論考の直接のきっかけとなったのは、2001年夏にマレーシア国民大学において開催された、マレーシア社会科学学会による第3回国際マレーシア学会議である。「マレー世界にお

ける「ブルーリズム」という題名のメインパネルでは、「ブルーリズム」にかんする多様な解釈が繰り広げられた(井口2001)。それらの解釈は、大きく三つに分けることができる。第一の解釈では、「多^{ブルーラル}であること」は、あるべき均質で統一的な状態を逸脱していることを意味する。第二の解釈は、「文化多元主義」や「多文化主義」などの考え方を思いおこさせるもので、複数の統一体が集まって、より大きな統一体を構成している状態である。第三の解釈では、「多であること」とは、統一的なものの境界線を汚染し、掘り崩し、統一的な思考それじたいを超克する「雑種性」である。

「多であること」にかんするこれら三つの解釈は、統一体という概念にたいして異なる位置づけにあるが、いずれも統一体という概念をともしないでは発想できない。統一体とは、分割不可能な統一体、すなわち、境界をもった有機的なボディであり、近代を定義づけ特徴づける概念の一つであるといえるだろう。とりわけ社会科学は、統一体としての不可分な個人をその最小の単位として出発し、その考察の対象である社会も国民も境界をもった統一体として考えるのである。すなわち「社会」は、国際世界の基本的な構成単位とされ、世界を分割すれば、自己充足的な文化と政府、経済をもった有機的な統一体としての「社会」が見いだされる、という常識にたつたうえでわれわれの社会観が形成されてきた(酒井1996:170)。

社会科学がじつのところ、「方法的ナショナリズム」(伊豫谷2002:21)によってなりたっているという批判は、このような「社会」観から来るのだともいえるだろう。はっきりとした境界をもった有機的な社会など、経験に照らして考えれば、どこにも存在しないことがわかる。だが、「近代において、社会、国民共同体、国民文化、国民語、国民経済、民族、人種といった統一体のそれぞれの輪郭が、たがいに重ね合わされて、相互に一致するかのように構想されるのは、経験的に見出される個々の近代社会のあり方から帰納されたのではなく、経験に先行する要求、あるいは、命令」(酒井1996:171)だからである。酒井直樹もいうように、統一的な思考は「倫理的要請」として与えられるために、経験における例外や反証をあげてもこのような格率を無効にすることはできない。

このように、統一体であることを原則とした知とは、統一体であれという命令として機能する。雑種的であるということはあるべき統一的状況からの逸脱であり、遅れであるという前提のもとで、この命令は、「雑種的で雑多なもの」をひとつの統一体へと帰属させ同化させようとする。だからといって、人類全体や地球市民といった地球上に唯一の統一体が、その命令のもとで構想されることはほとんどなく、むしろ、複数の統一体が並列的に存在する状況が考えだされる。もちろん、地球上に同時に複数存在するそれぞれの統一体の境界線は、けっして交叉しあったりせず、ある統一体に帰属している要素が、同時にほかの統一体に帰属することがあってはならないと考えられる。

さらに、その知=命令は、雑多なるものに恣意的に分断線をひいて、区別し、複数の統一体をつくりだすだけでなく、それらに優劣の判断を下し、序列化する働きをもつ。その序列の頂点を占めるのは、「西洋」であり、「白人」であり、「男性」であった。このような命令は

植民地主義支配をとおして世界中に広まり、人々は、この知=命令系を内面化しある特定の統一体に同一化しようとする中で、「主体」を獲得することとなるのである¹。それゆえ、植民地支配からの独立は、劣位の統一体へ同一化することによってはじめて可能となるのである²、独立後も植民地主義支配をとおして確立した「主体」構築のためのテクノロジーがひきつづき機能するのである。

しかしながらはじめに見たように、マレーシアにかんする社会科学的な知の形成は、たんに統一体の思考によってなされているだけでなく、「多」という概念を経由しながらなされているといえる。もちろん、それは統一体の思考の外部にあるのではない。だがそれは、人、言葉、土地、経済、政治などのそれぞれの輪郭がぴったりと重なりあっているという、社会科学が陥っている「方法的ナショナリズム」による考え方と単純に一致しているともいえない。マレーシアにかんする社会科学的な知が「多」という概念をめぐって形成されてきたのは、社会科学という学問分野がもつ二重性によるものであろう。社会科学は地球上のあらゆる「社会」にかんする普遍的原理の追求をその使命とする一方で、その原理に適合しない「外部」を暗黙のうちに設定し、それらを「エキゾチックな東洋」や「オリエンタル」として、たとえば文化人類学の対象であるとみなしてきた（伊豫谷2002:40）。ところが、二つの大戦と世界恐慌によってもたらされた総動員体制によって、科学的合理性の追求という社会科学の原理が合理的国家的統合とむすびついていくなかで、これまで社会科学の外部に位置づけられてきた地域が社会科学的な記述の対象とされるようになるのである（山之内1996、伊豫谷2002）。このようななかで植民地をいかに支配し管理するための科学としての「植民政策学」が、独立を果たした旧植民地をひきつづき管理するための科学としての「地域研究」が、それらを継承する新しい国民国家の「自国研究」が生み出されたといえよう。以上のように、植民地やポスト植民地とは、統一的な思考によって特徴づけられる社会科学的な知についての矛盾と両義性の地点である。「多」という概念は、そのような地点における折衝によって生み出された、それじたいが多義的な概念といえよう。

¹ ある「社会」が自己充足的な統一体であると考えられるためには、「他者」が必要である。エドワード・サイードが『オリエンタリズム』において明らかにしたように、他の「社会」を均質で一枚岩的な「他者」として表象することをおして、みずからの「社会」を均質で不可分な全体性として構築することが可能となるのである（Said 1979）。

² 植民地支配を被ってきたものたちが、「抵抗」のために団結するためには、既存の用語をもちいて「主体」を構成せざるをえない。「領有 appropriation」とは、この「主体」化プロセスにおいて、あらかじめ存在する支配者の用語を、みずからのつごうのよいように修正したり転倒させたりすることである。「領有」についてはPratt（1992）ならびに林（2001）を参照のこと。

2 地域研究——「^{ブルーラリティ}多」概念の登場——

第二次世界大戦後、世界政策の中心舞台をしめるのはもはやイギリスとフランスではなくなり、アメリカ合衆国の絶対的権力がこれにかわって登場し、イギリスとフランスの植民政策学は地域研究にひきつがれた (Said 1979:285)。地域研究の戦略的なブロック思考は、世界をいくつかの地域に分割することになり、その結果「東南アジア」という世界地域を誕生させた³。これまでイギリスの植民政策学によって主題とされてきた植民地マラヤも、「東南アジア」というブロックのなかの一つの要素としてみなされるようになり、「東南アジア」の経験を共有できると考えられるようになったのである。そこで、ビルマとインドネシアを直接の分析対象とした植民政策学である J・S・ファーンニヴァルの「ブルーラル・ソサエティ」論が、「東南アジア」という新しい地域概念のもとでマラヤに適用されることが可能になった。

2-1 ファーンニヴァルの「ブルーラル・ソサエティ」論

ファーンニヴァルは『植民政策と実践』(1948年)において「ブルーラル・ソサエティ」を「一つの政治単位のなかで隣りあわせに生活していながら、おたがいに混じりあうことのない二つないしそれ以上の要素 elements または社会秩序 social orders を内包するような社会である」(Furnivall 1948: 304-5)と定義している。以下では「ブルーラル・ソサエティ」の特徴を四つの観点から説明していこう。

第一の特徴は、「ブルーラル・ソサエティ」論が、植民地の空間を数えることのできる分析単位として採用していることである。ベネディクト・アンダーソンが、第三世界における新しい国民国家が領土的には植民地時代の行政単位を継承しているということを指摘するように、植民地を一つの空間として認識するというこの方法は、国民的な共同体の想像を導いていくものといえよう (Anderson 1990)。

第二の特徴は、「ブルーラル・ソサエティ」が「均質な社会」との対比によって描かれているということである。すなわち、「ブルーラル・ソサエティ」は均質性を欠いた不完全な統一体としてみなされているのである。たとえばファーンニヴァルは、「ブルーラル・ソサエティ」

³ 通説では、「東南アジア Southeast Asia」という名称は、第二次世界大戦中に日本軍によって占領された地域を回復するため、軍事戦略上、統一的对策をとる必要から、1943年セイロンのコロンボに設けられた連合軍の「東南アジア司令部 South East Asia Command」に由来する。だが、ファイフィールド・ラッセルは、「東南アジア司令部」という名称が採用された背景には、戦後の米国を中心とした「東南アジア地域研究」の礎の一つとなる民間の調査研究機関である太平洋問題調査会 Institute of Pacific Relations (通称 IPR) による広範囲にわたる活動があったことを指摘している (Russel 1975)。ラッセルによれば、1940年にウィリアム・ホランドが編集した太平洋問題調査会による研究報告書には「東南アジア Southeast Asia」という名称がすでにつけられていた。いずれにせよ、「東南アジア」という名称がとても新しいことが確認できるはずである。

のもっとも重要な特徴を、「均質な社会」ならもっているはずの共通意思が欠如していることであり、その結果、「均質な社会」なら当然組織化されるはずの共通の需要が欠如する、と述べている (Furnivall 1967 [1939]: 448～449)。この否定性は、エドワード・サイードのオリエンタリズムにおける「われわれ」と「かれら」という二項対立の図式を思いおこさせるものでもある。

第三の特徴は、ファーニヴァルのいう「多」が、「人種」や「民族」集団の並列的存在ではなく、労働の分業を意味しているということである。

プルーラル・ソサエティの特徴である、社会生活より生産を強調するということの一つの帰結は、労働の分業である。人種、信条、皮膚の色などによるグループ間の区別は原始的なものかもしれないが、それぞれのセクションは、これにしたがってみずからの生産機能を持つようになり、べつべつの経済的カーストへグループ化される傾向ができあがる (Furnivall 1967 [1939]: 450)。

ここから見てもわかるように、「プルーラル・ソサエティ」を構成する諸部分ないしは諸要素とは、たんに「人種、信条、皮膚の色」などのグループを意味するわけではない。重要なのは、資本主義経済への統合の結果、そのような異なるグループがべつべつの労働を担当していることである。すなわち、「人種、信条、皮膚の色」と労働の分業が一致していることが「プルーラル・ソサエティ」の「^{プルーラリティ}多」を特徴づけているのである。

「プルーラル・ソサエティ」の第四の特徴は、ネイティブをふくめたすべての構成要素に資本主義とその経済的価値が浸透しているということである。これまで一般的にはネイティブたちは資本主義化しないと考えられていたが、ファーニヴァルは植民地が完全に資本主義によって貫徹され、ネイティブたちでさえ利益最大化という価値を共有しているという (Furnivall 1948: 307)。この新しい視点の提供によって、ファーニヴァルの「プルーラル・ソサエティ」論が過去の「植民政策学」としてだけでなく、「地域研究」の時代においてもくりかえし利用されることになったといえよう。

だが、注意しなければならないのは、ファーニヴァルにとって資本主義の貫徹が、けっして肯定的な評価ではなかったということである。「均質な社会」において人々が「共通意思」によって結びつけられているのにたいし、「プルーラル・ソサエティ」の人々は、市場、すなわち利己主義的な経済活動においてのみ結びつけられている。その意味において「プルーラル・ソサエティ」における資本主義は、否定的で異常なものとして描かれているのである。

2-2 地域研究における「プルーラル・ソサエティ」概念の展開

それまでマラヤは、植民地経済の要請によって19世紀以来その内部に移民を多数かかえていたものの、植民政策学的な視点においては複数の移民集団から構成される「社会」とはみ

なされていなかった⁴。しかしながら、ファーニヴァルのいう意味での「ブルーラル・ソサエティ」論がマラヤに当てはめられることによって、移民社会が可視化されることになった。この新しい見方の中心を担ったのは、太平洋問題調査会の研究活動ではなかったかと思われる⁵。たとえば、1950年にラクノウで開催された太平洋問題調査会の第11回会議では、「アジアの情勢 — 若干の地域的发展 — 」という報告がおこなわれた。

マレイ〔マラヤのこと〕は複合社会である。1947年におこなわれた最近の人口調査によれば、マレイおよびシンガポールにはヨーロッパ人約一万八千人、ユーラシアン一万九千人しかいないのに対して、中国人百六十万九千人、マレイ人二百二十万三千人、インド人六十五万五千人がいる。マレイではマレイ人の数が最も多いが、シンガポールでは中国人はマレイ人のほぼ十倍もいる。中国人は主として商業と鉱山業にたずさわり、約三分の一ほどは農業と漁業を営んでいる。インド人の大多数はゴム園の労働者である。したがって、民族の相違は職業の相違に反映している。(日本太平洋調査会 1950:57)

この報告では、マラヤが「人種」別の労働分業によって特徴づけられた「ブルーラル・ソサエティ」として紹介されている。また、同会議の「東南アジア」円卓討議においても、マラヤの「ブルーラル・ソサエティ」は国民建設の障害としてとらえられている(日本太平洋調査会 1950:204~206)。すなわち「多」であるということは、「均質な社会」にたいする欠如なのであり、その原因は、なによりも人種別労働分業による経済格差に求められていた。

2-3 「三大民族」の誕生

マラヤがマレー半島という領土とともに1957年に独立すると、マラヤ=「ブルーラル・ソサエティ」という見方はますます優勢となった。チャールズ・ハーシュマンは、マラヤやマレーシアが「マレー人」「中国人」「インド人」という「三大民族」からなりたっているという、人口構成比からマラヤ/マレーシア論を開始する方法がくりかえされ、一種のルーティンになっていることを指摘している(Hirschman 1987:555)。

「三大民族」という表象は、「^{ブルーラル}多であること」の問題性についての折衝のなかで生まれてきたといえる。すなわち「三大民族」という表象の出現は、「ブルーラル・ソサエティ」論という強力な地域研究的枠組みを自己領有した結果であるともいえるだろう。「多であること」が欠如を暗示していることはたしかであるが、「多であること」のありように変更がくわえら

⁴ たとえばR. J. Wilkinson ed., *Papers on Malay Subjects* (1907~1911)を参照せよ。

⁵ 太平洋問題調査会の設立は第二次世界大戦以前にさかのぼる。さまざまな国と地域の研究者がかかわった民間の研究団体であるが、第二次世界大戦後しばらく地域研究の成立初期において、アメリカ合衆国を中心として活発に活動を展開した。太平洋問題調査会については、日本太平洋問題調査会(1951年)、原(1978~1979年)、片桐(1983年)、中見(1989年)を参照のこと。

れるようになった。つまり、「三大民族」であると考えられるということは、ファーニヴァルにおいては「烏合の衆」(Furnivall 1948: 307)として描かれていたそれぞれの要素が、「統一体」としてみなされていることを意味するのである。だがそのことは、それぞれの「民族」内部の多様性の抑圧をうながしていくことにもなる。また、「三大民族」という表象が、1963年のマレーシア連邦の成立後も引き続いて採用され続けることによって、マレーシアに生きる知におけるマレー半島中心主義を期せずして押し進めてしまう。

それだけではない。「三大民族」という表象は、「欠如」としての「^{ブルーラリティ}多」の原因を多様化させた。上で見たように、マラヤ独立以前の太平洋問題調査会の研究では、「ブルーラル・ソサエティ」は人種別の労働分業によって均質性を欠いた「社会」であると考えられていた(McGee 1964, Ratnam 1965, Enloe 1970, Vasil 1971)。人種別労働分業は、特定の「人種」と経済発展の能力を必然的に結びつける議論として理解されるさい、第三世界の新しい国民国家における近代化の可能性を排除することにもなりうる。「多であることの問題性」を人種問題として語ることへの批判は、「エスニシティ」という概念の導入によってなされたといえるだろう。ミルトン・ゴードンなどによって1960年代末からアメリカ合衆国において展開した「エスニシティ」概念は、シンシア・エンルーやジュディス・ナガタらアメリカ合衆国において専門訓練を受けた研究者によって1970年代からマレーシアの分析に使用され、1980年代にはマレーシア出身の研究者たちによっても大いに利用されるようになった(Gordon 1964, Enloe 1970, Nagata 1979, Syed Husin Ali 1984)。

マレーシア分析に「エスニシティ」概念が導入されたのは、1969年の「人種暴動」の記憶も新しい時期であると同時に、アジアにおける経済成長と近代化の可能性が明確にみえてくる時期でもあった⁶。エスニシティ研究が定着する1980年代には、エスニック・グループ別の労働分業がかなりの程度克服されているという認識に立って、「^{ブルーラル}多であること」の問題性をむしろ文化に求める主張がなされるようになる。タン・チーベンがマレーシアの国民統合の問題点を「エスニシズム」にあると述べるのはこのようなことを背景にしているだろう(Tan 1984: 215)。

マレーシアを「ブルーラル・ソサエティ」としてではなく、「三大民族」と表現することは、人種別労働分業という問題に修正や変更をくわえたり、あるいは批判をしたり、問題そのものを回避するというような方法を生み出し、「多であること」の原因を人種問題、経済問題、文化的問題などに多様化した。だが、「多であること」は「欠如」であるというもっとも強力な考え方は、この時点においてはいまだ残っていたといえるだろう。

⁶ 「人種暴動」の原因は「人種別労働分業」に帰せられ、これを解決するために1970年から新経済政策が開始された。たとえば萩原宣之『マレーシア政治論』(弘文堂、1989年)を参照のこと。

3 マレーシアにおける自国研究の展開

一国研究の成立は、ある国家や国民が一体であるという暗黙の前提が必要であり、同時にそのような一国研究を展開していくことじたいがある国家や国民の統一性を絶えず定立していくことである。はじめにも述べたとおり、このような統一性というのは倫理的な要請であって、どのような国民国家においても統一性は達成されてはいない。学問分野の形成が「主体」構築にかかわるのは、国民的な統一体でなければならないという知的な要請を人々が内面化し、それを実現しようとするからである。

しかしながら、ことマラヤ／マレーシアにかんするかぎり、問題は少々複雑である。それは、マラヤ／マレーシアなるものを主題にしようとするやいなや、統一性の否定形たる「多」という概念が姿を現すからである。そこで、マラヤ／マレーシアを主題とする自国研究は、その主題を成立させるために、「多^{プルーラル}であること」を解決するための学、国民的な統一体をうち立てるための学として形づくられていくのである。1980年代以降のマレーシアでは、前述のエスニシティ研究の方法論が積極的にとりいれられて、社会科学分野における自国研究的な知が「多であること」の超克をめざして形成される。マレーシアにおける「主体」形成とは、「多であること」をのりこえよという統一的な思考方法による命令を内面化したうえで「一」をめざそうとする、同一化の運動であるといえるだろう。以下で見るとおり、「多であること」や「一」をめざすことは、さまざまに定義されかつ解釈される。マレーシアにおける国民的な「主体」は、それらのさまざまな知の絶え間ない交渉の過程において形成されていくといえるだろう。ただし、統一性をめざそうという動きが、同時にその運動の中心性をずらしていく動きを含んでいることにも留意する必要があると思われる。「多」の多義性は同時に統一的な思考を攪乱するのである。

3-1 「一」をめざす——「多」の否定的イメージ——

国民的な統一体を構想しようとするプロジェクトは、多くの場合において、言語、文化、人々、経済などのさまざまなレベルの「統一体」の輪郭を、マレーシアという国家の境界線とぴったりと重なりあわせようとする方向でなされた。そのような「一」をめざすプロジェクトの一つとして、近代への同化があげられよう。「プルーラル・ソサエティ」が、経済発展した近代的で同質な社会との対比の図式のなかに位置づけられるとき、近代への同化は、プルーラルな状況をのりこえる一つの方策として構想されたのである。

一般的な近代化論では、エスニックな対立は前近代的な愛着の遺物としてみられ、近代的な「普遍」的価値に同化すれば、エスニックな対立は解消され、経済格差が是正されて国民統合が達成されると主張される。しかしながら、1980年代におけるマレーシアの社会学者たちは、巧みに隠された支配関係を近代化論のなかに読みとっていた。そこでかれらは、国民統合がなされない「プルーラル・ソサエティ」状況の原因を、経済植民地主義と階級対立

に見たのである (Tan 1982, Syed Husin Ali 1984, Sanusi Osman 1984)。そこでは、エスニックな対立は、ほんとうの対立 — 階級対立 — を隠蔽する虚偽意識としてみなされた。すなわち、経済植民地主義は、その支配形態と搾取形態をエスニック対立に偽装しているというわけである。サイド・フシン・アリは、マレーシアにおいて人種別労働分業 (サイド・フシン・アリのタームではエスニック・グループ別労働分業となる) を見ることはできず、労働の分業はエスニック・グループを横断していると主張している。

「一」をめざすプロジェクトの第二としてあげられるのは、近代西洋の「普遍性」との対比によって表象される「特殊性」の強調である。マレーシアの文脈においては、「マレー的なもの」や「イスラム」があげられよう。植民政学は東洋対西洋という優劣の判断をともなった二項対立の図式をもちいながら、「マレー的なもの」を発見したといえよう。「マレー的なもの」は、植民者によって「普遍」的な西洋に対する「特殊」として表象され、被植民者たちは、植民地支配の圧倒的な力関係のもとでは、そうした知の図式を内面化して「主体」形成せざるをえなかった。独立期のマレー人保守層が、国民国家マラヤを「マレー的なもの」を軸にしながら、マレー半島という領土、マレー人、マレー語といったそれぞれの統一体の輪郭がびったり重なりあうものとして構想したのは、植民政学的な知の領有の結果である (井口 2002)。そこでは移民たちは当然マジョリティに同化しなければならない。

しかしながら、地域研究的な認識枠組みのなかで優勢となった「ブルーラル・ソサエティ」的な見方のもとでは、「三大民族」のそれぞれの集団が、統一体を形成する命令として機能している。そこで「マレー的なもの」は、そのままではマレーシアという国家に存在する複数の統一体のうちのひとつをあらわすにすぎないのである。すなわち、「ブルーラル・ソサエティ」論によって、マジョリティとしての「マレー的なもの」という理解そのものが、それほど力をもたない状況になっているのである。「三大民族」的な見方の優勢のもとで、「一」をめざすための原理となるためには、「マレー的なもの」はもはや「特殊」ではなく、「普遍」にならなくてはならなかった。「普遍」としての「マレー的なもの」は、過去に設定され、それを未来に向かってとりもどすことが国民化を促進するのである。ワン・ハシムによる植民地時代以前のマラヤについての説明を見てみよう。

ファーニヴァルのブルーラル・ソサエティという概念は、植民地主義のもたらしたものをおもに経済の力にかかわらせるものである。かれが強く主張するのは、植民地時代以前には東洋の社会が共通の意味によって統一されていたということである。かれがいうには、植民地時代以前のマラヤはブルーラルな特徴をもっていたがブルーラル・ソサエティではなかった。疑うまでもなくそこには、ジャワ、スマトラ、アラビア、インド、中国を出身地とするいくつかのエスニック・グループが存在したが、これらの人々はべつべつに分離したマイノリティ集団をつくっていなかった。かれらは支配的な社会に同化されていたのである。(Wan Hashim 1983: 19)

ワン・ハシムによれば、植民地統治以前におけるマラヤは、ジャワやアラビアを出身とするおのおのの集団が支配社会に同化していたために、「ブルーラルでありながらもブルーラル・ソサエティではなかった」(Wan Hashim 1983:19)という。ワン・ハシムは、植民地時代以前のマラヤ社会は、さまざまな集団の同化の結果であるにもかかわらず、「均質な社会」ではなく「ブルーラルな特徴をもった社会」であるという矛盾した見方を提示している。この状況が矛盾なく理解されるには、支配的な社会が「普遍」である必要がある。すなわち、ほかのマイノリティ集団を超越する原理として「マレー的なもの」が提示されなければならないのである。そこでワン・ハシムは、植民地時代以前のマラヤでは、「マレー的なもの」は「ブルーラル」な諸集団を超越した「普遍的」な統合原理であると考えられており、植民地支配がかつてあった統一性を奪ったことを暗に示唆しているのである。

「マレー的なもの」を「普遍」として過去に設定するという統合のプロジェクトは、基本的には「多」から「一」をめざすものであると見てよいだろう。しかしながら、普遍としての「マレー的なもの」が、均質性ではなく依然「多」をともなっていることには注意しなければならないだろう。「普遍性」としての「マレー的なもの」は、均質で首尾一貫した超歴史的な統一体とは異なるイメージを持っているのである。すなわち、「マレー語」は植民地支配以前の商業の時代におけるマレー諸島全域で通用するリング・フランカとして、マレー半島は世界中からやってきたさまざまな人々が、出会い、交渉し、交易をおこなうプラットフォームとして構想される。その結果、「多」にいつしか新しい解釈がもたらされることになる。

すなわち「普遍」としての「マレー」を描くことができるが、結果として「多」にかんする否定的なイメージの転換をせまっているのである。「多」は、統合の欠如という否定的なイメージだけでなく、「多」でありながらも統合する可能性があるという新しいイメージを持つことになったのである。それは、マジョリティへの同化をこえて、つぎの部分で示す多元主義的構想へとつながり、さらには「一」をめざすという近代的な統一体的思考を超越する道さえ開くものである。

3-2 「多」の集合体としての「一」 — 「多」の肯定的イメージ —

1980年代のマレーシアにおけるエスニシティ研究の隆盛は、「多」にかんする新しいイメージを導くことになった。すなわち「多」は、これまでの超克されるべき否定的なイメージでなく、肯定的なイメージをもともなうようになったのである。複数の統一体の並存による統一された国民共同体という新しい構想は、合衆国のエスニシティ研究において登場した文化多元主義 cultural pluralism や多文化主義 multi-culturalism によって、よりはっきりとした輪郭をもった。

多元主義的構想とは、マジョリティ社会や西洋近代などに同化し、それぞれの集団が融合して新しい一つの集団をつくるのではなく、おのおのの集団が、その文化的な特徴を保持したまま国民的な統合を遂げるというものである(関根1994)。そこで、本論文の冒頭で述べた

ような「多」にかんする三つの解釈のうちの第二の解釈が導きだされる。すなわち、複数の統一体の並存としての一つの統合された国民共同体を示すものである。タン・チーベンはこの点をつぎのように整理している。

一般的にいつて、国民統合を達成するには二つの方法がある。ひとつは同化assimilationであり、もうひとつは調整accommodationである。同化は政治的に優勢な集団（通常は数のうえでの優勢）が少数集団を同化させるという統合の究極的な形態である。調整は、ある国の各エスニック・グループがみずからの文化的エスニック的なアイデンティティを維持しながら、国民統合の必要性をみとめ、その目的のために社会・文化的に、さらに政治・経済的な調整をおこなうことである。〔中略〕調整と同化の主たるちがいは、前者が文化多元主義 cultural pluralism を根絶しようとするのにたいして、後者はその現実を認めているところである。（Tan 1984：203）

それでは、多元的な状況すなわち統一体が複数存在するという状況を抑圧することなく、一つの国民的な統合体を作成するためには、なにが必要だろうか。タン・チーベンが述べるように、必要なのは、ブルーラルなそれぞれの統一体を超越した存在なり原理であり、ファーマニヴァルのいう意味での共通意思である（Tan 1984）。その意味で、マレーシアにおける文化多元主義は論理的には、「近代西洋の普遍性」を理念として掲げることもワン・ハシムが述べたように「マレー的なもの」を掲げることも、モハマド・アブ・バカルのように「イスラムの普遍性」を掲げることもできるのである。

同化やるつば化が、多元的な状況を抑圧して「一」をめざす運動だとすると、多元主義は、複数の統一体を前提として、それらを抑圧しないようにしながら、共通の国民的原理のもとで「一」をめざすものであるといえよう。少なくとも、多元主義においてそれぞれの統一体はマジョリティの文化に強制的に同化する必要はない。だが、複数の統一体として前提とされる諸集団が同質化の命令を受け、それぞれの集団の内部にある雑種性や、集団をまたがった雑種性は抑圧されざるをえない。さらに、タンが述べるように、多文化主義が複数の集団を超越する原理を必要とし、それが国民統合をめざすものであるならば、それはやはり「一」をめざす構想であるといえよう。その意味において多元主義的構想は、「一」であれという命令を内面化し「一」をめざす、まさに近代的な「主体」化テクノロジーのもとにあるということである。

もちろん、統一体という思考にかんする違和感はさまざまところで表明されている。たとえば、タンはマレーシアにおいては「文化多元主義」の前提として固定的で不変のエスニック・グループがあるわけではないと述べる（Tan 1984）。マレーシアのおおののエスニック・グループは何世代にもわたる接触を通して、さまざまな文化変容をおこしているからだ。だが冒頭にも述べたように、この枠組みが倫理的な要請であるために、実証研究におけるさ

まざまな例外や反証は、それがどれだけ積み重なろうと、枠組み自体を解体することはない。枠組みはそのつどそのつど変形してみずからを修正させていくのである。それでは、統一体を志向せよという近代の命令をのりこえ、「多」が「多」のままであることは可能なのだろうか。

3-3 構築されるアイデンティティ——統一体なき「多」へ——

冷戦が終結し、「グローバリゼーション」と呼ばれる動向が国民国家の領域性を揺るがしているようにみえてきた1990年代、マレーシアにおけるエスニック・アイデンティティの研究にも、「多文化主義」か「同化」かというだけでなく、アイデンティティという概念そのものを問いなおす視点がくわえられるようになった。たとえば、1996年10月9日に京都大学の東南アジア研究センターが主催した「マレーシアにおける国家、経済、アイデンティティ」という特別セミナーをもとに、ザワウィ・イブラヒムによって編集された雑誌『東南アジア研究』の特別号「変容するマレーシアにおいてアイデンティティを調停する」を見てみよう。

しばしば忘れてしまうことだが、国家、制度、さまざまな社会的集団、社会的な行為者をまきこんだ論争のプロセスもあるのである。そこではアイデンティティは継続的に構築されつづけており、再交渉され、再構築されている。ゆえに、アイデンティティを調停すること mediating は、近代国民国家の出現、強化、安定のすべての現象を考えるさいの重要なプロセスとして考えられなければならない。(Zawawi Ibrahim 1996:4)

ここでは、アイデンティティはもはや、本質的で不変で均質なものではない。ザワウィ・イブラヒムはみずからのアイデンティティ理解を、「お約束となった「プルーラル・ソサエティ」や「人種関係」アプローチから離れきった」ものであるという。

ザワウィ・イブラヒムは、この「新しい」アイデンティティ概念をあくまで「マレーシア」という主題のもとで論じており、そのかぎりでは、「一であること」を求める国民国家体制そのものを問いなおすことにはならないかもしれない。しかしながら、「つねに変化する現象であり、再定義され、再構築され、再構成され、変更され、それゆえ問題化される」というアイデンティティ概念それじたいは、統一体的思考への本質的な挑戦をともしない、国民的「主体」を構築せよという統一体を志向する命令にあらがうものといえるかもしれない。

だが、どうだろう。グローバル化は国民国家の境界線を揺るがしているといわれる。アイデンティティの流動性の主張は、このようなグローバル化による国民的なものの揺らぎと連動しているのだろうか。言いかえれば、アイデンティティの流動性の主張はグローバル化といっしょになって、統一体的な命令にあらがうのであろうか。シアトルやジュネーブの反グローバル化運動に見られるように、グローバル化は、世界に新しく分割線を引き直し、人々を世界的規模でおきる競争に投げ込んだともいえるだろう。そうになると、いまやグローバル

化に対抗して、国民国家体制を擁護することが必要となるのであろうか。

ここで問題になるのは、グローバリゼーションと国民国家体制が二者択一的な問題なのかという点である。いったい、グローバリゼーションが国民国家体制に取って代わるのだろうか。伊豫谷登士翁によれば、グローバリゼーションの脱領域的運動は、じつのところ、領域性によってなりたつ国民国家的な制度によって下から支えられている (Iyotani 2002)。その意味では、統一体であれという命令にあらがい、ブルーラルなままであろうとする諸実践こそが、植民地主義と共犯関係にある近代国民国家体制やグローバリゼーションに支えられた統一体的な思考の脱構築をうながすはずである。

むすび

本論文は、マレーシアにおける国民的な「主体」形成を、「多」という両義的な概念をめぐる知の折衝の過程において読み解くことを目標としていた。倫理的な要請としての統一体的思考は、自己領有の過程においてところどころに表明される違和感を抑圧しながらも、それらによって絶えずみずからを變形させ修正させていく柔軟性をもっている。ゆえに、統一体的なものへの違和感をすべて集めたからといって、統一体的なものに対抗するものをうち立てることはできない。

そうでありながらも、さまざまな痕跡と違和感と余剰に気を留め、見逃さないでおくことは、中心化をめざす統一体的思考の強力な運動をずらしていくことへとつながるのではないだろうか。ワン・ハシムが意図せずに示してしまった「一」をめざしながら「一」を越えてしまう「多」。タン・チーベンを示すエスニック・グループの統一性への違和感、ザワウィ・イブラヒムの指摘するアイデンティティの構築性。これらは、ほんの一瞬かいま見える、統一体的な思考からあふれ出ていく「多」なのである。

「多」という多義的な概念をめぐる交渉は、統一体的なものをめざす強力な動きを生み出しているものの、究極の統一体を完成させることには失敗する。統一体的な思考を脱構築することは、統一体的な思考方法の非本質性と歴史性を明らかにすることと同時に、統一体的な思考を揺るがし、汚染し、統一体の境界線からあふれ出てそれを掘り崩してしまう「多」へ着目することをともなうだろう。

参考文献

- Anderson, Benedict, *Imagined Communities*, rev. ed. (London: Verso, 1991 [1983]).
Enloe, Cynthia H., *Multi-Ethnic Politics* (Berkeley: California University Press, 1970).
Freedman, Maurice, "The Growth of a Plural Society in Malaya" *Pacific Affairs*, Vol.30, No.2 (June 1960).
Furnivall, J. S., *Netherlands India: A Study of Plural Economy* (Cambridge, 1939).
Furnivall, J. S. *Colonial Policy and Practice* (NY: Institute of Pacific Relations, 1956[1948]).

- Gordon, Milton M., *Assmiliation in American Life* (New York: Oxford University Press, 1964).
- 原覚天『現代アジア研究成立史論』(勁草書房, 1984年)。
- 林みどり『接触と領有』(未来社, 2001年)。
- Hirschman, Charles, "The Meaning and Cleasurement of Ethnicity in Malaysia" *Journal of Asian Studies* Vol.46, No.3 (August 1987).
- Iguchi, Yufu, "The Colonial Look in the *Papers on Malay Subjects*" 『言語・地域文化研究』第7号(東京外国語大学大学院, 2001年3月)。
- 井口由布「ブルーリズムをめぐる多元的状况 — 第3回国際マレーシア学会議から考える — 」 *JAMS News* No. 21 (September 2001)
- 井口由布「「主体」形成とマレー語の位置」『言語・地域文化研究』第8号(東京外国語大学大学院, 大学院博士後期課程論叢, 2002年)。
- 伊豫谷登士翁『グローバリゼーションとは何か』(平凡社, 2002年)。
- 片桐康夫「太平洋問題調査会の軌跡」『群馬県立女子大学紀要』第3号(1983年3月)。
- Mohd. Abu Bakar, "Islam, Etnisiti dan Integrasi Nasional" Syed Husin Ali ed., (1984).
- Nagata, Judith, ed., *Malaysian Mosaic* (Vancouver: University of British Columbia, 1979).
- 中見真理「太平洋問題調査会と日本の知識人」『思想』728号(1985年2月)。
- 日本太平洋問題調査会訳・編『アジアの民族主義』(岩波書店, 1951年)。
- Pratt, Mary Louise, *Imperial Eyes* (London and New York: Routledge, 1992).
- Russel, Fifield, "The Concept of Southeast Asia" *South-East Asian Spectrum* Vol.4, No.1 (1975).
- Said, Edward W., *Orientalism* (New York: Vintage Books, 1979).
- 酒井直樹『死産される日本語・日本人』(新曜社, 1996年)。
- Sanusi Osman, "Ikatan Etnik dan Kelas" in Syed Husin Ali ed., (1984).
- 関根政美『エスニシティの政治社会学』(名古屋大学出版会, 1994年)。
- Syed Husin Ali ed., *Kaum, Kelas dan Pembangunan Malaysia — Ethnicity, Class and Development, Malaysia* (KL: Persatuan Sains Sosial Malaysia, 1984).
- Syed Husin Ali, "Social Relations: The Ethnic and Class Factors" in Syed Husin Ali ed. (1984).
- Tan, Chee Ben, "Ethnic Relations in Malaysia" in David Y. H. Wu ed., *Ethnicity and Interpersonal Interaction: A Cross Cultural Study* (Singapore: Maruzen Asia, 1982).
- Tan, Chee Ben, "Acculturation, Assimilation and Integration" in Syed Husin Ali ed., (1984).
- Vasil, Raj. K., *Politics in a Plural Society* (KL: Oxford University Press, 1971).
- Wan Hashim, *Race Relations in Malaysia* (KL: Heinemann Educational Books, 1983).
- 山之内靖『総力戦と現代化』(柏書房, 1995年)。
- 油井大三元『未完の日本占領改革』(東京大学出版会, 1989年)。
- Zawawi Ibrahim ed., *Mediating Identities in a Changing Malaysia, Southeast Asian Studies*, Vol.34, No. 3, (December 1996).